松木家文書よりみる設計原案及び意図

建設工学専攻（修士課程）　504084　三輪　宝子（みわ　ほうこ）
建築史研究　指導教員　伊藤　洋子教授

序論

大工とは職人・技術者であり、建築家・設計者ではない。
この考えは近・現代だけではなく、どの時代にも通じるものなのか。

研究背景

多くの人が製作に関係する建築において、設計当初から完成まで一貫した尺度というものが必要である。

日本建築において、それは規矩術であり、木割術である。規矩術とは、規矩（コンパスと物さし）を用いた作図法である。また、木割術とは、垂木の「せい」と「幅」を用いて「枝」という単位寸法をつくり、これを基に建築各部材の大きさの割合を出した方法である。統一的な比例関係が用いられ、日本建築における設計技法の美的規範となった。

これらは、江戸中期以降、書物として刊行された。それにより、技術の視覚化、文字化は公となる代わりに建築表現の形式化につながった。

このように様式が形式化された中で、独自性を組み込むことは容易ではなかった。

研究目的

本研究の対象は下山大工松木家文書、及び同松木家の運四郎・輝殷親子の現存遺構である。

本研究では、松木家文書及び現存遺構から各々の木割の分析・比較を行う。その類似・相違点を明らかにすることで、松木がどの程度雛形を参考にし、どの程度オリジナリティーのある設計を行ったかを考察することを目的とする。

尚、本論の構成は設計原案・設計意図に分けて考察し、最後にその特性についてまとめる。

研究方法

松木家所蔵の古文書を解読し、棟札報告書等から現存遺構の所在確認を行う。それをもとに、実測調査を行い、木割比較・考察をする。また、実測調査を基に作成した図面及び古文書として残されている絵図面等より遺構を分析し、結論に結びつける。

1.　松木家概略

1-1　松木家概略

甲斐国（現在の山梨県）は 15・16 世紀において、同国の守護であった武田氏により大規模な寺社造営があった。

江戸時代に入り、河内路の重要拠点として発展した下山村には大工が増え、文政 6 年には働ける男の 8 割が大工で占めるほどになった。
それが後に甲斐国南巨摩郡身延町下山を拠点に、名をはせる大工集団「下山大工」となる。

松木家はその中に属し、江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産を行った、大工棟梁の一族である。

また、松木輝殷に関しては、天保 14 年（1843）、巨摩郡下山村に松木運四郎の子として生をうけた輝殷は、32 歳のときに松木八三郎の名で東山梨郡日川学校を仕上げる。その八ヵ月後には松木輝殷の名で中巨摩郡陸奥沢学校を仕上げる。

彼は、藤村式学校建築の創始者とも言われ、明治初期には藤村式建造物の洋風建築も数多く手がけている。

生涯を通じて学校建築 13 棟、病院建築 1 棟、橋梁 3 構、神社仏閣 21 棟、住宅建築 4 棟、その他 3 棟の設計及び彫刻を行っている。

1-2　松木家系図

曼荼羅より、松木重左衛門・松木重左衛門・松木運四郎の存在が明らかとなる。また、運四郎と輝殷の関係については、活動年代及び他の資料より、親子であることがわかる。

以上のことから系図の流れは
松木重左衛門―重左衛門―運四郎―輝殷
であることがわかる。

2.　松木家文書概略

2-1　松木家文書概略

同家には、江戸後期から明治期のものと思われる資料が凡そ 1000 点残っており、下山大工に属する他家と松木家の類似点及び相違点や、松木家の職掌に関して知る上で非常に貴重な資料であるといえる。

2-2　所蔵文書分類

所蔵文書を①作事関係資料、②土地及び金銭貸借資料、③その他に分類する。分類に関しては、平井聖氏の先行研究を参考とする。その中でも、作事関係資料の図面類に関しては、すべてで 319 点あり、それらの殆どが松木輝殷の手によるものである。

3.　遺構

3-1　現存遺構

松木家資料の中には名称がなく、絵が描かれているものも多い。その中から現存する寺社建築を表 1 に記す。

表 1　現存する寺社建築（松木家所蔵文書より）

名称	所在地	備考
身延山三門	甲斐国南巨摩郡	明治 34 年（二枚、年代不詳（一枚）
今井開運見沙門堂改築下絵図	富士郡元吉原村	年代不栄
下山南祠院	山梨県南巨摩郡福居村	松木輝殷之図　明治 28 年
金剛山慈眼寺		昭和 5 年

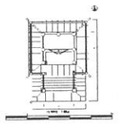
3-2　調査対象物

また、松木家資料に関係する人物によるもので「山梨県棟札調査報告書」(山梨県教育委員会編)より棟札が確認されたものは、

- 飛川神社本殿　文久四年建立棟札　下山村棟梁　松木左内
- 若宮八幡神社御殿　文政十一一年上棟棟札　下山　松木運四郎
- 八幡神社御殿　天保十四年上棟棟札　棟梁　下山荒町松木運四郎宣絹
- 薬明神社宝殿　天保十一一年建立棟札　棟梁　松木左内玄完
- 諏訪神社本殿　文政十二年造替棟札　大工下山村松木運四郎宣絹
- 諏訪神社大大神楽　寛政十年祈祷札　松木運四郎宣絹

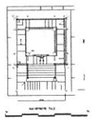
の六棟である。この中から、今回調査を行ったものは飛川神社・若宮八幡神社・八幡神社・薬明神社の四棟に加え、松木家資料の中で三枚設計図が見つかった「身延山三門」の計五棟である。また、景徳院境内は絵図面として残されている「景徳院五重塔」の参考資料として配置のみ調査を行った。神社に関しては、運四郎と左内各二棟ずつであるが、いずれも松木家資料の中に資料は無かった。しかし、雛形を読み解くことにより、彼らの設計手法を知る手がかりとなる。調査対象物の仕様に関しては表 2 に記す。

3-2-1　飛川神社本殿



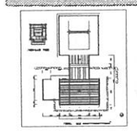
文久四年(1864)建立。構造形式は正面一間、側面一間の入母屋造で、屋根は桧皮葺である。前面に唐破風、両平に千鳥破風がついている。組物は三手先で、腰組付高欄をもつ。また至る所に彫刻が施されており、手の込んだものであることがわかる。

3-2-2　若宮八幡神社本殿



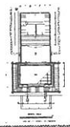
創建は文亀二年（1502）であるが、文政二年（1819）の大火により消失。天保二年（1831）に上棟し、構造形式は正面一間、側面一間の一間社流造。屋根は銅板葺の切妻造である。組物は二手先で、擬宝珠付高欄をもつ。彫刻は名手である、石川七郎左衛門重甫が担当しており、所々に配されている。

3-2-3　八幡神社本殿



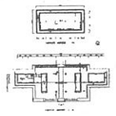
構造形式は正面一間、側面一間の一間社流造。屋根は当初桧皮葺であったが、現状は銅板葺の切妻造である。組物は二手先で、高欄は擬宝珠付高欄となっている。四方に縁をめぐらせ、脇障子には昇り龍と降り龍が施されている。比較的規模が小さく、簡素に見えるが、その分彫刻が映えて見える。

3-2-4　薬明神社本殿



天保十一年（1840）建立、構造形式は正面一間、側面一間の一間社流造で、正面軒唐破風付となっており、桧皮葺の屋根をもつ。組物は三手先斗拱で、高欄は擬宝珠付高欄である。懸魚には波模様が施されており、彫刻のほとんどが自然をモチーフにしたものとなっている。

3-2-5　身延山三門



寛永十九年（1642）に建立されたが、その後消失。明治四十年（1907）に再建し、今に至る。構造形式は、五間三戸二重門の十二脚門で、間口 23 間(41.8m)、奥行 7 間(10.3m)、高さ 7 丈(21.2m)となっており、二層目には擬宝珠付高欄がある。

表 2　調査建物仕様比較表（一部）

建築名		身延山久遠寺三門		八幡神社		若宮八幡神社本殿
所在地				身延町八日市場		身延町八日市場
建立年代及び根拠						天保二年上棟　同三年遷宮
棟札等資料		松木家文書あり		棟札有		棟札有
大工	棟梁	池上亀之助		松木運四郎		石川大工各工(建物部刻板たち)
	組物棟梁	松木輝殷				松木運四郎
基本構造	折れ×桁間	五間三戸二重門(十二脚門)		一間×一間		一間×一間
	屋根形式			切妻造　一間社流造		切妻造、一間社流造
	・材料	銅板葺(現代)		銅板葺(現代)		銅板葺(現代)
		瓦葺(当初)		桧皮葺(当初)		
	向拝	×		○(一間)		○(一間)
	縁高	×		×		
		切縁	二層			
軸部　柱形状		円柱(ケヤキ)	円柱(ヒノキ)	円柱		円柱
長押	頭	×	柱上に大輪	×		×
	内法	柱上に大輪	○	○		○
	腰	○	×	○		○
	切目	×	○	○		○
	地	×	×	○		○
神束(棟木)(象鼻)		内三間通りの出組中央に神束(棟木象鼻	神束(棟木)(上に大輪)	神束(棟木象鼻(こぶし鼻)		神束(棟木象鼻
(獅子鼻)				神束(棟木象鼻(獅子鼻)		
肘木	種類	三手先	三手先	二手先		二手先
	尾棒	× 隅三段は肘木形の持送り	○ 平 二段、隅 三段	×		×
	通肘木	○	○	○		○
軒		三軒繁垂木(平行垂木)	二軒繁垂木(扇垂木)	二軒繁垂木(三重の軒にならない)		二軒繁垂木
装飾		×	虹梁大瓶束　変形蟇股　虹梁下は絵様三つ繰	変形付太瓶束(及形は蟇)　蟇形彫刻		彫刻(龍鳳と獅)　変形の蟇股
縁・高欄	縁	×	切目縁	切目縁		切目縁

4　木割

4-1　雛形

松木家所蔵文書をもとに、神社に関しては『匠明』社記集「一間社流造」及び『大匠雛形』「一軒社向造」、『匠家雛形増補初心傳』上巻「一軒社流造」、『大工雛形』「一間社流造」を、身延山三門に関しては『匠明』門記集「五間三門之図」及び建仁寺流『諸堂社絵図』「五間三門」を用いた。

4-2　調査対象物

調査対象物の木割から、木割の大小は各人によって偏るわけではないことがわかる。このことは、このほかに木割の抜値を定める指標があるということを示唆している。

身延山三門に関しては、匠明に比べ全体的に木割が細いことがわかる。こちらも、匠明と実測値では一致する項目が少なかった。それにくらべ、社殿の木割比較では匠明のほうが新撰雛形よりも近似値を多く得ていたことを踏まえると、時代が下るにつれ雛形に対する意識が変わったものと考えられる。

また、4-1 であげた雛形と、今回調査した建造物の木割の比較を行い、『匠家雛形増補初心傳』上巻「一間社流造」と若宮八幡神社、八幡神社に関しては一致する項目が見られる。(表 3) そして、身延山三門と建仁寺流『諸堂社絵図』「五間三門」においても類似する点が多い。

表 3　木割比較表（一部）

建築名 建築形式 建立年	「匠明」 社記集 一間社流造 1608	「匠家雛形増補初心傳」上巻 一間社流造 1812	「大匠雛形」 一間社向造	若宮八幡神社 一間社流造 1843	八幡神社 一間社流造 1831
表間	22	22	22	22	20
表間(尺)	–	7.92尺	–	5.66	5.05
一枝寸法(寸)	–	3.60寸	–	2.58	2.81
柱太さ	2.2	2.5	2.2	2.44	1.88
／表間	0.1	0.11	0.1	0.11	0.09
GL～柱上端高さ	約33.88	44.21	25.23	45.28	37.56
／柱太さ	約15.40	17.7	1.2	18.6	20.0
組物(手先)	三斗組	出組	三斗組	二手先	二手先
妻架構(妻飾り)	豕扠首	虹梁蟇股	大瓶束	彫刻	大瓶束
階(大床上までの段数)	8段	6段	8段	8段	8段
内法長押成	1.32	2	1.32	1.74	1.41
頭貫成	1.54	2	1.54	2.21	1.45
向拝柱太さ	1.76	2	1.76	1.99	1.53
／柱太さ	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8
大斗幅	2.2	2.44	2.2	2.33	1.02
大斗成	1.32	1.5	1.4	1.35	1.28
大斗斗尻	1.32	1.47	1.2	1.44	1.33
大斗繰成	0.53	0.6	0.48	0.53	0.53
大斗成／大斗幅	0.6	0.6	0.6	0.6	1.3
大斗繰成／大斗成	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
大斗斗尻／大斗幅	0.6	0.6	0.6	0.6	1.3

4-3　景徳院五重塔

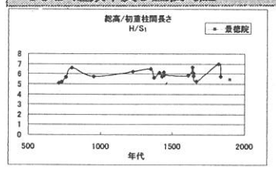
図 1　五重之塔新築再建之図

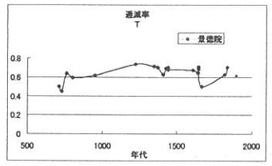
景徳院は 1582~1588 年に武田家一族の冥福を祈るために建立された寺院である。当初は壮大な伽藍を誇ったと伝えられているが、二度の火災及び明治期の大火により、その印象は薄れ、現在は三門のほかに本堂、庫裏、鐘楼堂などが立っている。今回取り上げる「景徳院五重塔」は松木家所蔵文書の中に境内図とともに絵図面として残されていたものであり、現存していない。景徳院「五重塔新築再建之図」は細部まで見事に描かれており、輝殷の意気込みが感じられるものである。

4-3-1　柱間寸法及び枝割

一般的な近世の塔とは異なり、景徳院五重塔は中の間と脇の間において一枝寸法がまったく一致しない。これは、枝割の考え方がなされていないということである。その理由としては、①「五重塔五重目扇垂木積」という所蔵文書より、各重において扇垂木で設計をおこなったこと、②古代・中世の設計法を用い、いわゆるリヴァイヴァリズムという考え方を持っていたことが挙げられる。②の理由としては、次項において述べる。

4-3-2　逓減率及び屋根勾配





景徳院五重塔の逓減については、先ず初重柱間長さを決め、二重柱間長さは初重×0.9、三重柱間長さは初重×0.8 という風に決めていったと考えられる。この様な柱間長さの決定法は、枝割の考え方のない古代期の塔において見られるものである。このことは、浜島正士氏の先行研究からも言えることができ、それによれば、塔の柱間寸法における枝割の制は中世に建てられた厳島神社五重塔（1407 年）からとなっている。それ以前は多少なりとも枝割の制が伺えるものの、完全とは言えず、古代においては全く枝割の関係性は見られない。五重塔の総高を H、初重柱間を S_1 としたとき、景徳院五重塔における H/S_1、逓減率の値は他の近世の塔に比べ小さい価となる。つまり、古代から中世に建てられた塔の値に近くなっているのである。また、屋根勾配に関しては五重は近世に多く見られる値になったものの、初重から四重の平均においては傾斜角度が 20 度を下まわる結果となり、やはり近世のものよりも小さい値となっている。

以上のことから、景徳院五重塔は枝割の制が完成し、広く流布される以前、つまり古代から中世前期の頃の塔とよく似たプロポーションとなっていることがわかる。

5　結び

以上、松木運四郎・輝殷による社殿及び「身延山三門」・「景徳院五重塔」と雛形の比較を行った。若宮八幡神社において棟梁と脇棟梁の関係にあることから、松木運四郎と『匠家雛形増補初心傳』を記した石川七郎左衛門重甫は師弟関係にあったことがわかり、木割を比較しても類似点が多いことがわかる。一方松木運四郎による八幡神社は若宮八幡神社に比べると一致項目が少なく、地垂木といった基本的な部分は一致しているものの、その他の部分のプロポーションはほとんどが大きくなっている。これは、棟梁運四郎が多少なりとも独自性を組み込んだ為ともいえるが、やはり『匠家雛形増補初心傳』を参考にしていたことは間違いない。その証拠に『匠家雛形相補初心傳』の中に「*建地格好及事は其地所の高低によって先板のひながたのと見合せハひきのつらに應ずるが如くなるべし*」とあり、運四郎も全体のプロポーションにおいて、それに従った為である。

また、輝殷に関して「身延山山門」においては勾配等全体のプロポーションは雛形と類似しているが、細かな部分では一致する項目が少ない。これは、細かな部分にオリジナリティーを組み込んだということである。

「景徳院五重塔」に関しては、細部意匠において近世の時代的特徴に加え、地域的特性も見られるものの、全体のプロポーションは同時期のものとは異なり、古性を感じさせる。同年に描かれた身延山三門の絵図と比較すると、身延山三門は六枝掛等枝割の制に従っているのに対し、景徳院五重塔は枝割の制に従っていない。複数の同一構造形式によって構成される塔において、輝殷自身の独自性、つまり古代―中世期の建築へのリヴァイヴァリズムの考えがうまく近世山梨の塔建築として融合されている。

以上、松木運四郎・輝殷親子を通して考えてみると、運四郎は下山大工の一員として雛形に基づいた卒のない設計を行ってきた、いわゆる「大工」であったが、輝殷は運四郎の雛形等に基づいた知識を踏まえた上で、独自の思想・意志を持って設計を行ってきた、いわゆる「建築家」であったことがわかる。

参考資料　平井聖：「中井家文書の研究」（日本建築学会論文報告集第 208 号、1973 年 6 月）田中昭臣：「大工書・溝口若狭林卿『方圓則覚』における近世の建築世界と明治期における展開」（大阪市立大学大学院修士論文）　山梨県棟札調査報告書　国中Ⅰ　山梨県棟札調査報告書　国中Ⅱ　山梨県棟札調査報告書　河内Ⅰ　山梨県棟札調査報告書　河内Ⅱ
近世大工の美学―環境倫理としての日本古典建築学―　内藤昌著　中公公論社　1997 年
中部地方の近世社寺建築 (2) 山梨・長野　近世社寺建築調査報告書集成　村上ニ一、大和習、亀井伸雄、　山梨県教育委員会、長野県教育委員会編　東洋書林　出版　2004 年　下山大工資史料　加藤為夫著　平成 16 年　身延町誌　身延町編集委員会　1970 年